



秋の教養講座 2018「服装で読み解くフランス文学」 ーバルザック『ふくろう党』を例にー



今年も秋の教養講座が、去る 11 月 23 日（金・祝）、放送大学奈良学習センターとの共催により、同センターにおいて開催されました。参加者は 44 名。講師は、大阪府立大学教授で、当協会会員でもある村田京子先生。内容は、小説のなかに描かれている服装に着目し、その服装が象徴している人物の性格と政治的信条との結びつきから、作品の構図を明確にしようというもので、パワーポイントで服装を絵や図版で示しながら、速射砲のようなトークに思わず惹きこまれてしまいました。

取り上げた作品は、バルザックの『ふくろう党』。フランス革命において、徴募兵制度に不満を持った農民らにバックに、王党派が反革命を展開したという史実を元にしています。そこに登場する人物の服装は、農民の着るヤギの皮が獣性と野蛮さ、

共和軍のブルーの軍服はエネルギーな共和国の権化、ふくろう党党首の狩猟服に白の帽章は貴族の美しいイメージをそれぞれ象徴。共和軍幹部とふくろう党党首の両者は敵対しながらも率直な気性と男らしさという点で共通していますが、総裁政府になってからの共和派主導者は伊達男姿で偽善と狡猾を表し、まったく対照的。女性はどうかというと、ふくろう党党首を補佐する女性の乗馬服スタイルは男らしさ、パリから共和派のスパイとして送り込まれた女性の洒落女スタイルは貴族性と娼婦性を象徴していますが、結局女性の場合は政治的信条を持つに至らず、感情や情緒によって行動するという風にバルザックは描いているとのことでした。



村田先生のお話の後、質問が次々と出て、緑の眼が狡猾さや悪を表すという話から、フランス人の眼の色は何種類あるかという質問まで飛び出しました。今後、小説や映画に接する場合に、ストーリー以外の、服装などの細かい描写に注意して鑑賞したいというご意見がありましたが、これは今回の講演会参加者が全員感じたことだと思います。



講演終了後、「菜宴」に移動しての懇親会には、会員以外の方 6 名を含め 21 名が参加。ジャメ副会長による「老いも若きもフランス人の全員が好きなバルザックに乾杯」の発声の後、お料理とワインを楽しみながら、一人ずつ感想や近況を述べて交流。談論が熱を帯びて当初の予定より大幅に時間超過となるほどでした。（杉谷健治）

講演終了後、「菜宴」に移動しての懇親会には、会員以外の方 6 名を含め 21 名が参加。ジャメ副会長による「老いも若きもフランス人の全員が好きなバルザックに乾杯」の発声の後、お料理とワインを楽しみながら、一人ずつ感想や近況を述べて交流。談論が熱を帯びて当初の予定より大幅に時間超過となるほどでした。（杉谷健治）

講演を終えて 村田 京子

卒業論文、修士論文、博士論文と一貫してバルザックの作品を研究してきましたが、このところジョルジュ・サンドをはじめとする女性作家や、絵画と文学との相関関係を探る上で、ゴーティエやゾラなど他の作家たちに視野を広げてきました。今回の講演を依頼された時、久しぶりにバルザックに戻ってみようと考え、『ふくろう党』を取り上げました。18 世紀文学までは登場人物に関して（例えば『マノン・レスコー』）、どのような衣装を纏っていたのか、ほとんど言及がありません。「歴史の秘書」を自認するバルザックが登場して初めて当時のモードに作家が関心を持ち、詳細な描写をするようになりました。そして、服装は社会階級や政治的信条、経済状態や性格までも表すようになったわけです。この講演によって、服装を手がかりに小説を読み解くことの楽しさを味わって頂けたならば幸いです。今後も『人間喜劇』の他の作品や他の作家たちの作品を取り上げ、服装と人物の関係を探ってみたいと思っています。大勢の方々に熱心に聴講して頂き、質疑応答も盛り上がり、本当に楽しいひと時を過ごすことができました。

2018年度ガイドクラブ 吉野川沿い散策(10/13) 報告

2015 年度から再開したガイドクラブも、今年で 4 回目を迎えました。今回は少し遠出して、吉野町の吉野川沿いの名所を訪ねました。11 時に近鉄大和上市駅に総勢 13 名が集合、すると嬉しいサプライズがあり、地元吉野町のコミュニティバスを使って吉野の奥深い魅力を探る旅を毎月企画されている「吉野スタイル」磯崎典央さんがボランティアガイドに駆けつけてくださいました。今は閑散とした大和上市の通りをゆっくり歩きながら、かつては伊勢街道を往来する人々ににぎわったことや、歴史や建築に関する興味深いお話をたくさん聞くことができ、最初の目的地「妹背山」が眺められる立野までの散策が、とても楽しいものとなりました。

立野で磯崎さんと別れ、コミュニティバスで次の目的地「宮滝」に向かいました。宮滝は縄文遺跡のある古くから人が住みついた土地。『古事記』(712)『日本書紀』(720)に登場する吉野は「吉野川」流域で、吉野の文化の起源は「川」にあると推定されていますが、なかでも宮滝は「川の吉野」の中心地といえる場所。持統天皇はじめ多くの天皇が行幸した「吉野離宮」があったとされる場所でもあります。一行はまず吉野川に架かる橋の上から、大伴旅人の万葉歌に「夢(いめ)のわだ」と詠われる象(きさ)の小川が吉野川に流れ込む地点を見下ろし、山々に囲まれた吉野川の風景を眺めながら対岸に渡り、展望所では青空の下、全員が横一列に並んで写真撮影しました。

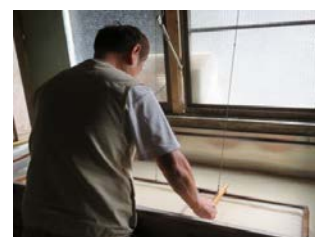
続いて「桜木神社」に参拝。境内には、注連縄がはられた杉の巨木がどっしりと空高く聳えていました。山部赤人の万葉歌「み吉野の／象山(きさやま)の／まの木末(こぬれ)には／ここども騒ぐ／鳥の声かも」(巻 6-924)の碑の前で、柏木隆雄先生(大手前大学)が、万葉学者として名高い犬養孝先生そっくりの節で朗読してくださいました。先生は学生時代、犬養先生に担任の先生としてお世話になり、犬養先生が好まれていた宮滝にはかねてからいちど訪れたいと思っていたとのこと。そのような縁のある柏木先生から「犬養節」をきくことができたのは、何ともありがたく嬉しいことでした。

吉野川沿いの「まつや食堂」さんのお座敷での昼食後、「梅谷醸造元」を訪れ、吉野杉の大きな樽に仕込まれた諸味を見学しながら、醤油造りのお話を伺いました。土地の歴史に詳しい御主人が配布くださった、江戸時代の宮滝風景(岩礁から投げ銭稼ぎの村人が川に飛び込む様を描いた絵図)は、とても興味深いものでした。宮滝からは、まつや食堂さんが出してくださったマイクロバスにて、窪垣内の「福西和紙本舗」に向かいました。

手漉き和紙は古くからの吉野の伝統産業ですが現在では 5 軒のみ。その中で福西さんの製造する和紙は、丈夫で年を経ても紙の色が変わらないとの定評があり、文化財修復用の和紙として日本国内だけでなく、ボストン美術館、大英博物館からも注文があるそうです。フランスのルーブル美術館、ギメ美術館からも工房見学に来られるとのこと。この日は現在 6 代目の福西正行さんが実際に和紙を漉くところを見学させていただきました。楮をはじめとする原材料を溶けこませた白色の水に簾を入れ下からすくいあげ、全体が均質になるように伸ばして、湿紙を一枚一枚重ねていきます。和紙作りはこの工程がもっとも重要で、技術の習得に何年もの歳月を要するそうです。細心の注意を払って黙々と紙漉き作業を続ける福西さん、その傍らで和紙作りの工程を私たち一行にわかりやすく説明してくださる奥様、お二人の姿がとても印象に残りました。見学後、見晴らしのいい庭で奥様が出してくださった珈琲で一息つき、福西さんご夫妻を囲んで記念撮影しました。コミュニティバスで大和上市駅に戻り、心地よい疲れを感じながらも全行程を無事に終えて解散。有志での懇親会では、「うわきや」さんの美味しいおでんとお酒、きつぷのいい女将さんをまじえてのぎっくばらんな語らいや歌が続く、楽しい宴席となりました。

今回のガイドクラブ散策では、下準備の段階から、吉野町ビジターズビューロー、吉野スタイル、まつや食堂、梅谷醸造元、福西和紙工房はじめ多くの方々から助言や協力をいただきました。地元のみなさんのお話のおかげで、はじめに外から見ただけではわからなかった吉野の魅力をいくつも発見することができました。目に見える風景に、想像力をはたらかせて見る風景が重なり合うと、この上なく豊かな世界が広がります。吉野にはこれからも何度も足を運びたいと思いました。また、奈良県知事公室国際課発行「奈の良」第 7 号、仏語版「Na no Ra」No7(国際交流員を務めたジャンヌ・オストリーさん作成)には、福西和紙工房、梅谷醸造元他の案内が掲載されており、「奈良県 HP 情報誌「奈の良」」で検索すると参照することができますので、こちらもぜひご覧になってください。(浅井直子)

◆◆◆いつもは曇りが多い吉野らしいですが、この日は気持ちの良い晴天で散策日和でした。最初に大和上市の旧街中を案内してもらいながら向かったのは妹背山が一望できる川沿いです。学生の頃この辺りでバーベキューをしたなあと思い出しながら、歌舞伎の題材にもなる場所なんだと驚きました。その後も、宮滝、醤油の蔵、手漉き和紙の見学など、吉野の新しい一面を知ることができました。そして、最後は幻のおでん屋さん(予約がある時以外はお休みで、知る人のみ知る電話番号しか予約できません)で懇親会です。おでんと吉野の地酒で乾杯しつつ、一人ずつ自己紹介をしました。自分史や興味のあることを話してくださったり、歌を披露して頂いたり、楽しく過ごしました。お昼の散策時とは違った印象を受けました。お昼は吉野の新しい一面を、夜はみなさんの違った一面をと発見の多い一日でした。とっても楽しかったです。(今西絵美)



興福寺ギメ美術館出陳記念慶讃コンサート(10/28)報告

秋も深まった10月28日(日)の夜、興福寺本坊で、SAKAMOTO 古楽アンサンブルによるコンサートを興福寺さんとの共催で実施しました。三野会長の開会挨拶での「眼を閉じると興福寺本坊がヴェルサイユ宮殿に変わります」との言葉どおり、本坊の大広間はルイ十四世の典雅な宮廷の雰囲気満たされ、奈良日仏協会会員、一般合わせて90名近くの方が畳に座って、神妙に音楽に聴き入りました。江戸時代半ばのものという日本の自然を描いた戸板の絵を背景にしたフランス古楽の演奏は、ともに和と洋の伝統を感じさせるもので、その取り合わせが何とも絶妙なものでした。

リコーダー、テオルブ、ヴィオールの三種の楽器は、最近の音楽にある脅迫的な鋭い音や甲高い音、大音量とは違って、いずれも穏やかで優しい音色で、空間に染み渡ってくるような響きがあり、心が安らぐのを感じました。これが古楽の魅力です。三つの楽器の合同演奏のほか、テオルブ独奏、ヴィオールの二重奏、テオルブとヴィオールといった組み合わせで、それぞれの楽器の響きがうまくブレンドされ、味わいに変化して楽しめました。リュート系の楽器と説明があったテオルブは、初めて見る楽器で、竿の部分がとても長くかつ弦がたくさんあり、不思議な形をしていましたが、低い音がとても魅力的。

SAKAMOTO 古楽アンサンブルは、奈良日仏協会会員でもある坂本利文さんのご家族三人で構成され、スイスで活躍されている息子の龍右さんとの合同演奏は6年ぶりだと話されていて、ご家族の愛情がうかがえるほのぼのとしたコンサートとなりました。アンコールの「ラ・マリアンヌ」の演奏では、秋の夜長にぴったりの曲という前振りがありましたが、聞いているうちにいつの間にか、「赤とんぼ」の歌になっていました。坂本さんの演奏は、いつもアンコールにこういった仕掛けがあるのが面白いところです。(杉谷健治)



御仏(みほとけ)と仏蘭西(フランス)との御縁に感謝！

奈良日仏協会様のご協力により、平成30年10月28日「ギメ美術館出陳記念コンサート」を無事開催できたこと感謝申し上げます。開催までの経緯を振り返ってみたいと思います。

同年2月、三野博司先生にお目にかかる機会を得て、「平成31年、尊像3軀がフランスに出陳されることもあり、フランスと関連した慶讃行事ができないかと考えています」と相談に伺いました。その結果、興福寺史上初、古楽器の演奏会をすることに！

3月、坂本利文様が北客殿を下見。打ち合わせを重ねて、開催2か月前から参加者を募りました。80名以上の参加者が集まり、ファミリーコンサートならではの心温まる素晴らしい会が実現。さらにフランス語に翻訳した境内案内図のご奉納。フランスおよびフランス語圏からの参拝者にお寺のことを正しく知っていただけるようになりました。奈良日仏協会の皆様に重ねて御礼申し上げます。合掌。(法相宗大本山 興福寺 南 俊慶)



興福寺ギメ美術館出陳記念コンサートに出演させて頂いて



私にとってこのコンサートは、今までの経験が一点に集約した本当に貴重なものでした。と言いますのも、南円堂の鐘の音が聞こえてくる奈良町に住み、境内を毎日の様に散歩し、長年に亘って中金堂が出来上がって行くのを間近で見ていたその興福寺の本坊で演奏できたのですから。フランスとの関係から言えば、私が最初に訪れた外国がフランスだった事。そしてその時にギメ美術館を訪れた事も。また息子が大学に行ってからファミリーでの共演の機会が無かったのが、この機会に実現したのも我々にとってはメモリアルで嬉しい事でした。

当時のヴェルサイユで演奏されたであろう曲を、和室でそしてスリッパを履いての演奏はミスマッチと言えばそれまでですが、コンサートのタイトルに即していえば、むしろピッタリだったと思います。今回、演奏の機会を作って頂いた興福寺様、そしてその実現の為に一方ならぬお骨折りを頂きました奈良日仏協会有志の皆様には、本当に感謝の念で一杯です。(SAKAMOTO 古楽アンサンブル 坂本利文)

第49回奈良日仏協会「シネクラブ」例会(11/25)報告： ルキーノ・ヴィスコンティ『山猫』(1963)

◆◆◆アラン・ドロンの特集の締めくりに伊仏合作の大作を選びました。昨年引退を発表、9月22日NHK BS プライムで「アラン・ドロン ラストメッセージ ～映画 人生 そして孤独～」が放送されました。この時 82 歳。誠実で暖かくユーモアに富む魅力的な人でした。この中で『山猫』に触れ、ヴィスコンティ監督から俳優とは何かを徹底的に叩き込まれたこと、尊敬していたバート・ランカスターと出会えたことは大きな収穫だったと語っていました。(大内隆一)

◆◆◆孤児で無資産、しかし前向きに生きる甥の伯爵に対するサリーナ公爵の無私の愛情。それは激動する時代のなかで、黄昏が迫る公爵の人生、すなわちこの長大な映画にさす一筋の光となっています。美しい映画でした。ところで 10 月に別の映画会で見える機会のあった『マンチェスター・バイ・ザ・シー』(2016、アメリカ)という映画も、孤児となった 16 歳の甥と、その後見を引き受けた男の心の物語でしたので、すこし不思議な気がしました。(山本恭介)



◆◆◆貴族の古い館が舞台となり、迷路のような部屋や、森のある広大な庭が描かれるレニエ、ブリヨンらの小説を好んで読んでいますが、今回は、その情景を淡い色調とロマン派情緒溢れる音楽とともに映像として見ることができ、とても嬉しく思いました。蜘蛛の巣だらけの絵のある廃墟のような部屋をめぐるシーン、絵画やタピストリの飾られた大広間で貴族や士官らが延々と繰り広げる舞踏会に、古き西欧への郷愁が掻き立てられました。(杉谷健治)



◆◆◆少し前にアラン・ドロンの『地下室のメロディ』を見る機会があり、『山猫』を鑑賞することになった。私は若い頃より、映画館からの帰り道、いつも今観た映画の名場面が思い出され台詞が自然に聞こえてくるようであった。しかし、今回はそれがなかった。余韻を楽しむ、それを含めて「映画」ということか。すると、短く編集したバージョンこそ本物ではないかと、これは私の直感である。そして、シチリアの歴史を学びたいと思った。(野島正興)

◆◆◆犬と一緒にドロロンがとてもチャーミングでした！映画には何匹もの犬たちが登場し、貴族の館の室内やテラスで人間たちに寄りそう姿、大地を疾走するシルエット等、どれも恰好良かったです。没落するフランス上流社会の人々の哀愁を見事に描いたルノワール『ゲームの規則』(1939)でも、「狩猟」と「舞踏会のダンス」の場面が圧巻でした。『山猫』ラストでは、華やかな世

界から一転、猫の佇む薄暗い路地に消えてゆく主人公の後姿が印象的でした。(浅井直子)

◆◆◆ほとんどがロケ地での撮影らしくとても豪華でした。そんな中、神父を通してしか、自分の恋心を父親に打ち明けられない公爵の娘に、7 人も子どもを産みながら夫に一度もおへソを見せたことがない公爵夫人。対して、自分の美貌を自覚し、それを最大限に活かして人々を魅了する財力ある村長の娘。彼女はしっかり自分の恋心を満たします。そして、主人公の公爵は、娘の恋を叶えるより、甥の(ひいては、一族の)成功のため、理にかなった考えを実現させます。キレイで華やかなだけではない、参考になる人間みのある映画でした。(今西絵美)

◆◆◆舞踏会で女性たちが着けていた円形に大きく広げたスカートは《クリノリン・スタイル》と呼ばれ、当時流行の頂点にありました。ペチコート改良が進み細い鋼製輪を布で繋げた鳥かご状の枠へと変化したもので、実物を検分しましたが、見た目より軽く、サリーナ公爵とアンジェリカが滑るようにワルツを踊っていました。一方赤シャツ隊の衣装は、現在も《ガリバルディシャツ》の名で立ち襟、肩章付きシャツが愛用されています。衣裳デザイナーのピエロ・トージは『山猫』でアカデミー賞衣裳デザイン賞にノミネートされました。長く記憶に残る作品でした。(伊藤美知子)

第50回奈良日仏協会シネクラブ例会(2/24)の案内

★2019年2月24日(日) 13:30~17:00

★奈良市西部公民館5階第3講座室(予定)

★プログラム:『ルージュの手紙』(Sage femme、2017年、117分)

★監督: マルタン・プロヴォ Martin Provost

★参加費: 会員無料、一般300円

★飲み会: 例会終了後「味楽座」にて

★問い合わせ: Nasai206@gmail.com (予約不要)

★4回にわたる「アラン・ドロン」特集では俳優ドロンの魅力をじっくり堪能することができました。

奈良日仏協会シネクラブ例会は来年2月で第50回を迎えますが、新たな特集として「女優たちの輝き」を組み、第1回目は『ルージュの手紙』(2017年東京で開催されたフランス映画祭のオープニング作品)をおおくりします。フランス語の原題《Sage femme》が示す通り、助産婦として働く主人公クレール(カトリーヌ・フロ)は、消息不明だった義母ベアトリス(カトリーヌ・ドヌーヴ)と30年ぶりに再会します。対照的な二人の女性の性格や生き方が少しずつ浮き彫りになるにつれて、観客は二人のいずれにも共感又は反感を覚える面があることに気づくかもしれません。二人とももう若くはなく、いろんな事があってもそれまでの人生を生きてきたという経験からか、たとえ新たな一日が不確かな未来の始まりかもしれないと動じることなく、淡々と「日常」を生きていきます。そんな彼女たちの姿に思わず乾杯! したくなるような作品です。※詳細は、「奈良日仏協会」のHPをご覧ください。(浅井)



「フランス鉄道紀行」(2) 《ブイヤベースは“arnaque”?》 知念 宏司

パリとマルセイユは日本で言えば東京と大阪のようなものだから、早くから鉄道で結ばれている。両都市間の鉄道は 1860 年までにはできており、高速化の努力も払われてきた。1950 年代には名列車「ミストラル」が 8 時間 36 分で両都市間を結んでいたが、今や TGV なら最速 3 時間 5 分だ。Marseille Saint-Charles 駅から観光の中心である旧港 (Vieux Port) へ行くには、地下鉄を利用することになる。現在の旧港はきれいに整備され、観覧車もあるし、下面が鏡張りの巨大な屋根も設置され、まるで神戸か横浜のような風情さえ感じさせる部分もある。

そんなマルセイユの名物はブイヤベースだ。ぜひ本場で味わってみたい。夏の休暇でここを訪れる予定にしていた筆者は、ストラスブール大学での受け入れ教員だった B 氏にその話をすると、マルセイユ在住の知人によい店を訊いておいてやる、とのこと。早速メールが届いたが、その人の意見は“La bouillabaisse c'est un peu l'arnaque”という一文で始まっていた！ B 氏は“not good and expensive”と注釈をつけてくれていたが、この arnaque という言葉、「詐欺、ペテン」といった意味である。日常使われる言葉らしいが、現地の人に詐欺呼ばわりされてはブイヤベースも形無しだ。実際のところは、地元で水揚げされた鮮魚を使わず、冷凍魚を使う店が多い、ということらしい。そうした中で推薦された店は“Chez Fonfon”だった。旧港からはやや遠いが、旅行ガイドにもよく載る名店だ。確かにこの店では、調理前の魚を皿に盛って見せてくれるから間違いはなさそうだ。そしてスープと具材（魚、じゃがいも）を別々の皿で供するのがここのやり方だ。また甲殻類は入らない。これが基本のマルセイユ・ブイヤベースのようだ。

食事を終えて宿のある旧港に戻ったのは夜 10 時頃だった。夏の旧港はまだ人であふれている。岸壁に座って水面に映る月を眺めていると、時の経つのを忘れるようだった。



かつて「ミストラル」を牽いた 241P 型蒸気機関車。国立鉄道博物館（ミュールーズ）蔵



Chez Fonfon のブイヤベース（下）と調理前の魚（上）

「徒然フランス音楽メモ」(4) 《ゴリラ 牢獄 孔雀》 大内 隆一

今は昔、音楽の時間に一人ずつ前で歌わせられるテストがありました。高学年になっても幼児の声しか出ないので思いきり声を張り上げて教室の笑いを取ることはできたけれど、それから歌がキライになった。「愛の讃歌」「パリの空の下」などシャンソンの名曲もムードミュージックと思っていた。やや久しうあって、塚本邦雄『薔薇色のゴリラ』を手に取って見て、《詞を見ずしてなにがシャンソンか》と知るに至ったのです。「・・・美男のゴリラが檻を脱走、逃げ残った婆さんと中年判事の二者択一を迫られ、あろうことか後者を選び、耳を掴んで灌木林に引摺り込む・・・犯された判事が最後の一瞬、ママン！と叫んで哭く・・・」ジョルジュ・ブラッサンスの「ゴリラ」。艶笑ボルノではないですか。ピアフ、グレコ、モンタン、フェレと、前衛短歌の雄は好き嫌いを露わにシャンソン歌手とその歌の世界を濃密に語って行くのです。巻末の歌人自身の訳になる 32 の対訳は、文字通りめくるめくシャンソンの詞華集です。



三野先生の「学び直しのフランス語」講座では象徴派の詩が歌になったものも聴くことができました。フォーレの「牢獄」はヴェルレーヌの「屋根の上の天空は・・・」を歌曲にしたもので、ジェラルド・スゼーのバリトンの渋く甘い声が独房の男そのものに聞こえる。ジャック・プレヴェールの詩には可愛いアニメを伴って、フランス版「みんなの歌」みたいなのがありました。「蝶。二つ折りの恋文が、花の番地を捜している。」などで有名なジュール・ルナール『博物誌』からラヴェルが作曲したのは、孔雀・コオロギ・白鳥・カワセミ・小紋鳥の 5 篇で、原文はそのままピアノ伴奏が付いています。音楽的にはピアノが主で、歌の方はことばの意味と響きを自由に放出するようで、どこか義太夫節のような雰囲気があります。（左はボナールの挿絵、孔雀 Paon）

オペラとなるとまったく不案内なのですが、今年 7 月のフランス・アラカルトで内藤義博さんが紹介された 17-18 世紀のフランス・オペラが、私でも楽しく興味深く聴けたのです。フランス歌曲の鉅脈には未知の宝がどっさり埋蔵されていると分かり、楽しみがつきません。

フランス料理の食材 《茸》：トリュフを中心に 米津 春日

フランス料理のご馳走に欠かせられないものに、キャビア、フォワグラ、それにトリュフ truffe があります。では、トリュフっていったいどんなもの？ それはフランスの数ある茸の中でも王様と云える茸のことです。日本料理でいえば松茸のようなもので、香りを活かした季節のご馳走です。「トリュフィエ（白柏）」という木の根に自然発生する地下の茸です。そしてその発生の秘密は明らかにされていません。7月に発芽し、雨が充分に降ると秋までにはすっかり育ちます。最初の霜と最後の霜の間、すなわち11月の末から3月の初めがトリュフの採取期です。

フランスのペリゴール地方では、昔から豚をトリュフ狩りに使っていました。特に牝の豚は嗅覚が鋭敏なのでトリュフを探し出すのが得意で、時おりトリュフを食べさせながら育てると、トリュフに目のない豚になるそうです。農家のマルセル叔母さんから聞いたトリュフ狩りのお話を紹介しましょう。叔母さんは雌豚のルイズに結んである革紐に引っ張られる様にしてトリュフィエの林に入って来ました。ルイズは鼻を鍬の刃の様に使って土をほじくり、足で猛烈にひっかきながら深さ20センチほどの穴を掘ると、いぼいぼのある黒いゴルフボールの様なものが出てきました。ルイズがかぶりつく前に、マルセル叔母さんは彼女の尻をひっぱたいて、そのトリュフを取り上げてしまいました。私たちはルイズに穴を掘らせては、尻をたたいて取り上げるという作業を続け、お昼頃までに19個の大きなトリュフを採りました。虫が食っていたり、しなびた様なものは、みんなルイズに食べさせてやりました。私たちは持ってきたサンドイッチや山羊の乳でつくったチーズを広げて昼ごはんを食べ始めました。いま採りたてのトリュフは塩をぱらっとかけただけで食べます。風味と、歯ごたえと、香りの3拍子揃ったペリゴール地方のトリュフは、ハツカダイコンのような歯触りで、食べた後いつまでも口の中にデリケートな味わいが残ります。

掘り出したトリュフは灰褐色で、切ると、ごく小さい斑点が入っています。手触りがしつかりとしていて、弾力があり、虫がついていず、水に入れるとすぐに沈むものが上質です。悪いものは必ず浮いてしまいます。トリュフは使う前にブラシで丁寧に土を払い、水洗いはしません。フランス語の「トリュフ」は、実は「犬の鼻先」という意味なのです。現在では、豚の代わりに犬を使って、トリュフ探しをしているようです。トリュフの香りを染みこませた肉片を犬に与えて訓練をし、トリュフ犬として育てています。

今世紀の初めには2000トンもあった生産量が、今では100トンを超えるほどに減少しつつあります。最近のトリュフの値段は高騰し、1キロで20万円、30万円の値段がつきます。それでもフランス料理のご馳走といえば、必ずといっていいくらい使用されます。トリュフの香りが他の食べ物に移って、大いに味を引き立ててくれるので、ペリゴール地方の農家の人達は、容器に卵とトリュフを入れて密閉し、ひと晩おいて卵を取りだし、高価なトリュフを使わずに、トリュフの香りのたっぷり入ったオムレツを作る、と云われています。

フランス料理では、トリュフ以外にもたくさんの種類の茸が使用されていますが、日本でよくみられるのはジロル girolle（うすたけ）、セープ cèpe（ぬめりいぐち）、モリーユ morille（編み笠たけ）、シャンピニオン champignon（はらたけ）などです。このうちはらたけは、英語名でマッシュルームと呼ばれ、ソース、スープ、付け合わせ、調理の補助材料と、その使用範囲は広く、また料理の味だしに欠かせない存在です。以前は穴蔵、地下室、温床を利用して栽培していましたが、現在は湿度や温度の管理ができる建物の中で、人工堆肥を使用して安定した収穫が得られるようになってきました。



ペリゴール地方の黒トリュフ



トリュフを探す豚



トリュフを探す犬

ここではトリュフ料理の代わりに、いろいろな茸を使ったポターージュの作り方を紹介します。

【材料 4〜5 人分】玉葱 150 グラム、ご飯 100 グラム、水 900cc、チキンの固形スープ 2 個、バター大さじ 1 杯、生クリーム（乳脂肪 47%）100cc、マッシュルーム 1 パック（80 グラム）、エノキタケ 1 パック（100 グラム）、シイタケ 1 パック（100 グラム）、茸を炒めるためのバター大さじ 1 杯

【作り方】

1. 玉葱を薄切りにしてソース鍋に入れ、バター大さじ 1 杯でしんなりするまで炒める。
2. ご飯、水、固形スープを加え、20 分ほど弱火で煮て、ミキサーにかけ、滑らかになったら鍋にあける。
3. マッシュルームとシイタケは軸を取って二つ割りにし、薄切りにする。
エノキタケは穂先から 6 センチ位で切って、それをさらに 3 つに切る。
4. バター大さじ 1 杯で茸類を炒め、先のスープに入れる。
5. 弱火で少し煮て味をなじませ、生クリーム、塩、こしょうで調味し、あつあつのポターージュをとりわけます。



フランスの郷土料理（6）ジビエ(gibier)と向き合う～今後の食事情

最終便の今回は、私がこの土地のフランス料理人の一人であり、そして日本の食を守るために、目をそらしてはいけない **gibier** についての話をさせていただきます。近年、TV やマスコミ、ニュースで取り上げられる事が増えました。人間にとって不都合で迷惑な有害野生動物（猪、鹿、等）が全国的に増加を続け、山間部の田畑を荒らしています。有能な農家さんは高齢化し、太刀打ちできずに農家を廃業。狩猟の有資格者も同じく高齢化し免許を返上しています。これらの負のスパイラルにより日本の農作物の生産量が減少し、10年以内に海外の生鮮食品の輸入が国内生産量を上回ると発表されています。

私たちにできる事はないでしょうか？ 少なくとも料理人は野生動物（ジビエ）料理の美味しさを皆様に伝え、安全な調理法を伝え、そして日本の農産物の素晴らしさを料理で伝えていく使命があると思います。私はフランスでジビエ料理の多くを学び、日本においてもその技術を磨いています。いつかは人の役に立とうと狩猟と猟銃の免許も取得しました。狩猟しに山に入ると命掛けの勝負です。自分の命、動物の命、自分や人間の愚かさを感じ、大自然の中の自分の非力さ等が頭をめぐり緊張感が高まります。決して狩猟は簡単に挑んではいけないとご理解いただけるでしょう。

ヨーロッパの貴族の間で愛された料理の一つがジビエ料理です。一方日本でも古来からジビエが盛んに行われてきた歴史があります。ジビエ料理に使われる肉の種類としては、鹿、ウサギ、イノシシ、カモなどの野鳥があげられます。珍しいところではハクビシンやヌートリアなどもジビエ料理に使われています。

ここで、私の恩師ベルナール・アンドリュウ氏のスペシャリテ **Col-vert roti aux cinq épices**（青首鴨のロースト 五香粉の香り）を簡単にご紹介します。羽を笔った青首鴨の胸肉はヘーゼルナッツオイルで半生にソテーしてハチミツを塗って五香粉をまぶしてサラマンドルで表面を焼きます。腿肉は赤ワイン煮込みにします。付け合わせは、洋ナシの赤ワイン煮とマロングラッセ、トランプット茸のバターソテーです。ソースはブルーベリーソースを合わせます。血を使ったクラシカルなソースではないところが素敵です。これが今では私のスペシャリテです。そして、後世に引き継ぐべき逸品だと思います。1年間のご高覧ありがとうございました！（法人会員 北田浩久、「茶の里 映山紅」【山添村伏拝 888-1 tel.0743-87-9670】シェフ）



法人会員紹介

ワインショップ「サン・ヴァンサン」

2002年に奈良ではじめてのワイン専門店としてオープンして以来、ワインをブランドや価格で選ぶのではなく、本当に飲み頃となった、今飲んで美味しい世界各国のワイン（フランスワインをメインにイタリア、スペイン、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、チリ、ドイツ、南アフリカ、アルゼンチン、日本）を、2000種類以上取り揃えております。店内は1年を通じて最適な温度に管理され、ワインの品質にもこだわっております。また、サン・ヴァンサンは数多くのレストランにもワインを納めており、大量にワインを仕入れている為に商品をより安く仕入れており、専門店でありながら価格もとてもお買い得になっております。なお日仏協会の会員の方には特別に、12月いっぱい10%引きにさせていただきます。今後ともどうかよろしく願いいたします。



奈良市学園朝日町 2-2 米田ビル 102 Tel : 0742-43-3832 月曜定休（竹中宣人）

野菜ダイニング「菜宴」

いつもご利用いただきましてありがとうございます。誠に勝手ながら店舗改装工事の為、平成31年1月21日～2月8日（予定）の間一時休業とさせていただきます。店内中央のテラスを取り除きワンフロアの客席として拡大し、改装後には着席50名様、立食100名様までのご利用が可能になります。同窓会や演奏会、2次会などお客様のご要望に応じて素敵な宴会をご提案いたします。改装後のメニューに関しましては《季節の大皿》2,500円税込やパーティーに特化した飲み放題付きのプラン2種類を追加し幅広い世代のお客様にご満足いただけるように改革を進めてまいります。改装後も引き続きご愛顧いただきますよう何卒よろしくお願いいたします。



奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F Tel : 0742-26-0835 不定休（久保田耕基）

Nos amis francophones à Nara (12)

現在、奈良県で暮らしている4人の素敵な女性を紹介します。リヨン第3大学から奈良教育大への交換留学生として、9月から1年間滞在することになったカミーユさんとヴィクトリーヌさん。奈良県知事公室国際課に国際交流員として8月から勤務されているシェルブール出身のヴェロニックさん（ジャンヌ・オストリーさんの後任）、そして日本人のご主人とともに、室生寺の近くの村に暮らすようになった森田コリーヌさん。みなさん情熱があつてとても感じのいい方たちです。これから奈良日仏協会の行事等を通じて、会員のみなさんと交流の機会があるといいですね。（編集部）

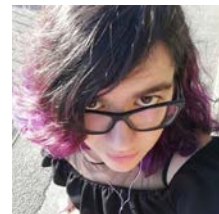
Camille Dubois-Chabert さん

Bonjour ! Je m'appelle Camille Dubois-Chabert et je viens du Sud de la France, d'une ville qui s'appelle Montpellier. C'est une ville un peu plus petite que Nara, proche de la mer, et très agréable à vivre.

Mon intérêt pour le Japon remonte à il y a environ huit ans lorsque j'ai commencé à me plonger dans les manga, la musique et les jeux japonais. J'ai depuis effectué un voyage au Japon avec mes parents qui m'a poussée à apprendre la langue japonaise, et j'aimerais aujourd'hui devenir soit traductrice dans l'industrie du jeu vidéo, soit enseignant chercheur à l'université, sur des sujets liant culture moderne et culture historique du Japon. Mes passions se résument à l'écriture, la lecture, la musique (en jouer comme en écouter) et les jeux vidéo. J'aime donc les arts en général, et suis notamment capable de jouer du piano et de chanter. Les voyages me plaisent aussi particulièrement.

Pour finir, je tiens à dire que j'apprécie beaucoup la vie à Nara, à la fois pour son aspect calme dans les quartiers résidentiels et pour son centre-ville animé. J'ai hâte d'en découvrir plus au sujet du Japon et de sa culture au cours de cette année d'échange, aussi courte soit-elle !

フランス南部のモンペリエから来ました。奈良より少し小さく、海に近くて快適な町です。日本への興味は、8年くらい前、マンガや音楽、ゲームにはまってからです。私は両親から日本語を学ぶようにいわれ、一緒に日本へ旅行しました。いま私はビデオゲーム業界の翻訳者か、日本の近代文化と古典文化の関連を調べる大学研究者になりたいと思っています。私が夢中なのは執筆、読書、音楽（聴くのと演奏）、ビデオゲームです。つまり私は芸術が好きで、とくにピアノ演奏と歌ができます。旅行も大好きです。最後に私は、住んでいるところの静かさと繁華街の賑やかさの両方の奈良を楽しんでいると言いたいです。短い交流期間ですが日本とその文化についてもっと知りたいと思っています。（カミーユ・デュボワ・シャベール）



Place de la comédie Montpellier

Victorine Arnaud さん

Bonjour à toutes et à tous ! Je m'appelle Victorine Arnaud, je suis étudiante en 3^{ème} année de LEA anglais-japonais à l'université Jean Moulin Lyon 3. Toute petite déjà, je nourrissais pour le Japon une passion sans limites, au premier abord par les films d'animation des Studios Ghibli. Je suis venue au Japon pour la première fois en mars 2014 pour une année d'échange à Kyoto grâce à l'association AFS vivre sans frontières. J'y ai vécu des choses inoubliables et je n'ai jamais cessé de penser au Japon. Ainsi me revoilà au pays du soleil levant ! Je suis actuellement étudiante à l'Université d'Education de Nara, chaque jour je me plaît à arpenter les ruelles de la ville, toujours accompagnée par les biches des environs. J'aime regarder l'effervescence des touristes devant le Nakatanidou (célèbre et inégalé magasin de mochi à Nara), me balader près du sanctuaire Kasuga-Taisha et manger un curry japonais chez Miriam. Je m'amuse à chercher les chats dans la ville, une fois la nuit tombée, jetez un coup d'oeil dans la rue de Sanjou dans le temple de la borne kilométrique de Nara.

ジャン・ムーラン・リヨン第3大学のLEA（応用外国語）英日の3年生です。小さい頃から私はスタジオ・ジブリのアニメで日本に夢中でした。2014年3月、《国境なく生きる AFS》のお蔭で1年間京都で交流するため初めて日本に来ました。忘れられないたくさんのことがあり、こうして私はまた日の出ずる国にいます！現在は奈良教育大学の学生です。毎日通りをずんずん歩きたい、鹿たちがいつもついて来ます。餅屋の中谷堂前で観光客が沸き立っているのを見たり、春日大社の近くを散歩したり、喫茶「みりあむ」でカレーを食べるのが好きです。街の猫を見つけるのも好きです。夜になったら三条通りにある奈良県里程元標の寺の中を覗いてみてください。（ヴィクトリーヌ・アルノー）



Veronique Denis=Laroque さん

Je suis arrivée à Nara au mois d'août en pleine chaleur estivale et je profite maintenant d'un climat plus clément pour continuer à découvrir Nara et ses alentours. L'automne est la saison que je préfère au Japon et je suis récemment allée admirer les couleurs automnales au temple Hasedera près de Sakurai. Le temple est situé à flanc de montagne et l'on atteint le pavillon principal en gravissant un escalier de 399 marches. Le gravir permettrait de se débarrasser des 108 illusions humaines qui mènent à la souffrance ! La terrasse du temple offre une vue magnifique sur la vallée et les visiteurs étaient venus nombreux profiter des teintes automnales mais également prier Kannon aux onze visages dont la statue haute de 10m aurait été sculptée en trois jours à partir d'un camphrier sacré. En redescendant du temple par la rue commerçante, je me suis laissée tenter par les spécialités locales, des *kusamochi* grillés, gâteaux à base de pâte de riz et d'armoise, et des *kakinoha-zushi*, sushis conservés dans des feuilles de kaki que l'on ne trouve qu'à Nara. Je continue donc de découvrir ma nouvelle région d'adoption et je l'apprécie encore un peu plus à chaque nouveau lieu visité.



8月の猛暑に奈良に到着し、今は奈良やその周辺を見ていくのに気持ちのいい気候を楽しんでいます。日本の秋が好きで、最近長谷寺で紅葉狩りをしました。本堂は山腹にあり、階段を399段上がります。階段を上がることで百八つの煩惱を取り除くといわれています！回廊から溪谷の雄大な眺めが望めます。人々は紅葉を楽しむだけでなく十一面観音を参拝します。この高さ10mの仏像は、一本の楠の神木から3日間で彫り出されたといわれます。門前商店街を歩いて寺を下って行くと、地元の名物に誘われます。焼いた「草餅」（モチとヨモギ）、「柿の葉寿司」（柿の葉で包んだ寿司）は、奈良でしか見られません。私はいつも取り上げるべき新しい場所を探し、そこを訪れる度に、ここが一番と思うのです。（ヴェロニック・ドニ＝ラロック）

森田 Coline さん

Depuis le mois de juin dernier, j'ai la chance d'habiter avec mon mari dans un petit hameau de Nara proche du célèbre temple Murô-ji. Ici les habitants sont accueillants et bienveillants, et ils sont aussi très ouverts, ce qui explique sans doute qu'un nombre relativement important de maisons sont occupées par des personnes venues d'ailleurs, grâce à quoi le village reste vivant. Bientôt, ce sera encore davantage le cas, avec l'ouverture au début du printemps du café-restaurant Méli-Mélo. Vous connaissez sans doute déjà Sylvain et Iku Chabrol, et leurs adorables enfants ? Grâce à eux, j'ai la chance de pouvoir parler français tout en vivant au Japon. C'est un grand luxe !



室生の家からの眺め

C'est la première fois que je participe activement à la vie d'un village : ménage collectif de la maison communale et des routes, préparatifs pour la fête du sanctuaire... Cela permet de connaître les gens et de se sentir légitime. Souvent, les voisins nous apportent des légumes de leur potager, des vêtements qui tournent de maison en maison, ou encore du bois de chauffe pour le bain.

Ces jours-ci, le paysage est splendide : l'automne touche à sa fin et la nature a revêtu sa parure orangée. Les susuki qui poussent ici à foison sont particulièrement beaux lorsque la lumière du soleil vient les éclairer. Chaque saison révèle la prodigalité de la nature et me donne l'occasion de me dire : décidément, quelle chance de vivre dans ce petit coin de paradis !

昨年6月から室生寺の近くの小さな集落に、夫と一緒に住む機会を得ました。ここの人たちはフレンドリーで思いやりがありとてもオープンです。それはかなりの数の家屋に他所から来た人たちが住まわっているからで、これによって村は存続しているのです。これはメリメロカフェが来春に開店することでも分かります。みなさんはおそらくシャボール夫妻と子供たちをご存じでしょう。彼らのおかげで、日本に住みながらフランス語を話す機会があります。私が村の活動にはじめて参加したのは、コミュニティハウスと道路の大掃除と氏神様の祭りの準備です。人と知り合え、住民とみとめられた感じがしました。近所の人たちは自分の畑でとれた野菜、家から家へと移動する服、また風呂を沸かす薪を持ってきてくれます。このごろ風景がとても美しいです。晩秋、自然はオレンジ色を装います。群生するススキに日が当たると特に美しいです。どの季節も自然の驚異を明らかにし、私はその度に、この小さな楽園に生活することはなんと幸せなんだろう、とつぶやいてしまいます。（森田コリーヌ）

会員投稿

「春日若宮おん祭り」がパリへ

坂本 成彦

日仏友好 160 周年を記念して今年 7 月～来年 2 月、パリで開かれている「ジャポニズム 2018：響きあう魂」は安倍総理提言により企画され、外務省所管の国際交流基金が日本文化の多様な魅力を PR する試みで、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック大会を見据え日本のお祭りや伝統工芸など文化を通じて地方の魅力を発信し、インバウンド観光の促進、日本製品の海外展開に貢献することを期待するものです。

その一環として「さんさ踊り」（岩手）、「阿波踊り」（徳島）など七つの祭りが 10 月 20 日～22 日の 3 日間パリで実演されることになり、奈良の「春日若宮おん祭り」も 21 日、22 日の 2 日間参加することになりました。

「春日若宮おん祭り」は春日大社の摂社である若宮神社の例祭であり、平安時代後期の関白藤原忠通が五穀豊穡、万民和楽を祈願して始められたもので、その後一度も途絶えることなく継続し、今年で 878 年目を迎える格式高い伝統のお祭で、雅楽、舞楽、田楽、能といった日本の古典芸能が一堂に会し、一連の時代行列のお渡り式と神事が国の重要無形民俗文化財に指定されています。

毎年 12 月 17 日に馬 50 頭、約千人の奉仕のもとに行われますが、今回のパリでは縮小して日本から 60 名、現地のフランス人と在留日本人で 50 名、計 110 名が演舞と行列を実演しました。場所はメトロ 1 号線 Les Sablons 駅下車アクリマタシオン公園(Jardin d'Acclimatation)で、ご多分にもれず入口で厳重なセキュリティーチェックを受けます。広大な園内の舞台で能、田楽、舞楽などを演じ、園内を時代行列が行進しました。多くの家族連れで賑わい、屋台村として出店した各ブースも大繁昌でした。

単調と思われる能や舞楽、巫女の舞などがフランス人の心を捉えたようでした。道具、装束などの運搬など準備には苦労ありましたが古来の神事のお祭に何らかの理解が深まったのではないかと思います。私事ながら 40 数年前の生活を思い出し、錆びついたフランス語を楽しみました。（おん祭り保存会会長）



アズナブール逝く

中辻 純子（梨里香）



ここ何年か彼の来日コンサートには、必ず《ラスト》の文字が付け加えられていたので、私達はその言葉に少し鈍感になっていたかもしれない。5 月の予定が骨折のため 9 月に延び、その公演に《奇跡》という形容が加わっていたにも拘わらず、彼はまた近いうちに来てくれるだろうと思っていた。現に 2 時間ほどのステージの間、休憩も取らず 20 数曲を歌い上げるほどのパワー。英語、フランス語、スペイン語を駆使した見事な歌唱とトーク。年齢を感じさせないそのパフォーマンスに会場にいた観客達は誰ひとり、そう当の本人さえ 2 週間後に永遠の別れがやって来る

などとは想像すらしていなかっただろう。それほど、その訃報は突然だった。

「シャンソン歌手シャルル・アズナブール死去、死因不明…」

1924 年ロシア革命から亡命の途にあったアルメニア人の父母のもと、パリに生まれ、9 才から舞台に立ち始める。この天才型の歌手は 20 歳頃ピアフに見い出されるが、デビュー当初は中々評価が得られず、苦しんだ時期もあるという。最初の大ヒット「わが人生」をオランピア劇場で歌った時には既に 30 歳を超えていた。だが、以来次々とヒットを飛ばす。「帰来青春」「ラ・ボエム」等々。スターダムを駆け上がった後は、映画に出演し、ニューヨークに渡り、初来日は 1968 年彼が 44 歳の時だった。80 年に渡り第一線で活躍し続けた彼は、2017 年にハリウッドの殿堂入りを果たし、また 94 歳を迎えた今年、日本政府より旭日小綬章を授与されている。

実に華々しい歌手人生。しかし、彼の偉大さを語るのにはそれだけでは足りない。1988 年祖国アルメニアの大地震直後よりボランティア活動に奔走し、「Aznavour pour l'Arménie」を設立、数々のチャリティーを行なう。また、長らく国土を持たなかった母国のために財団を立ち上げ、移民の受け入れや教育文化支援を今日まで続けている。その社会奉仕の姿勢は生涯変わることなく、2011 年には東日本大震災復興のためにシャトレ劇場でチャリティーコンサートも行っている。

9 月 NHK 大阪ホール of the stage に彼が現れた時、観客はどよめき、そしてその深く優しい声に瞬時に引き込まれたのだが、それは彼の心の奥底から湧き上がる魂の響きが、人間愛が、声から身体から溢れ出していたからかもしれない。

検視の結果、死因は浴室での心不全と呼吸不全と発表される。半ば自然死…。

シャンソン界の巨星は、神様に導かれたかのように逝ってしまった。そう言えば、コンサートでアズナブールが最後に歌った曲は「世界の果てに」だった。本当に私達の手の届かないところに彼は行ってしまった。

今はただ冥福を祈るのみ…。

ピアノ・リサイタルを終えて

三木 康子

2018 年 10 月 10 日 いづみホールに於いて「三木康子ピアノ・リサイタル—時空を超え未来に響く音を求めて—No.6」を開催した。演奏曲目の中でフランスに関係する作曲家の作品についての所感を述べてみたいと思う。

現代邦人作品に尾高惇忠（1944— ）作曲「ピアノのためのバラード第2番 ～時の彼方へ～」を取り上げた。尾高は、パリ音楽院で学び音楽史上名を馳せたフランスの大作曲家達に師事した。その中の一人のマルセル・ヴィッチュ氏（ローマ賞受賞）には、私もパリ留学中に楽曲分析の講座を長期間受講した。現代曲を模索している時、この作品に出会った。

とても美しく和声感がオシャレで洗練され、フランスのエスプリが感じられ、フレーズがずっと大きく流れていて、A—B—A+コーダの構成の中に静けさ、優しさ、激しさ、荘厳さを感じ、ぜひこの現代音楽を弾きたいと思った。この曲を弾き進むことは、未来への扉を開き未来の空気を吸い生命そのものであるように感じた。

当日、「ピアノのためのバラード第2番 ～時の彼方へ～」を弾き始めると、会場が静まり返り、私は会場の皆様と一緒に会話しているような雰囲気を感じた。

曲の終わり近く8回の鐘の音もいつもと違う弾き方をしている自分に気付いた。何故だろう。緊張の中の安らぎ、そして聴衆の方々と共に会話しているこの喜びは、何処からきているのだろうか。私は、大声で叫びたい！私のピアノは、生きている！聴衆の皆様と会話している！人間は一人ではないのだ、明るい未来がある！

演奏の後、大きな拍手と共にブラボーが鳴り響いた・・・。

当日は、奈良日仏協会より沢山の方々がご来聴下さり誠にありがとうございました。

銀座の個展を終えて

赤木 睦代

10月15日～21日の7日間、銀座ムサシ画廊において、個展を開催しました。おかげさまで、東京在住の方をはじめとして、日本各地から400人を超える方々がお越しくださいました。皆さまから嬉しいお言葉を頂き、感謝しています。

思えば、牛のもつ原始的なエネルギーに魅せられて以来50年近く、牛を画材に描き続けてまいりました。様々な牛の姿を求めて、国内だけでなくスペイン、フランス、モロッコなど、20か国を訪ねました。

牛たちの素朴で、土着性にあふれたどっしりした姿が私の感性を呼び起こしてくれます。ユーモアのある表情にも創作意欲をもらいます。私が受けた感動を、天空に向かわんとするような牛の群れや、たくましい牛の顔を吉野杉に描くなど、あらゆるものを駆使して、牛の放つ「生の賛歌」としてお伝えしたく作品作りに取り組んでいます。

フランス・パリの個展に続き、3年後にはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラでの個展を計画しています。私の出身地、和歌山県田辺市熊野古道とサンティアゴ巡礼の道は、姉妹道の提携をしていて、世界遺産にも登録されております。かの地での個展開催の夢が実現するように、画道に精進したいと思っております。



「発心」



「蒼天 (金陽)」

2019 年度 総会および新年会の開催（予告）

奈良日仏協会の《2019 年度 総会・新年会》を以下のとおり開催する予定です。

- ❖ 日時：2019 年 2 月 3 日（日） 総会 14:30～15:30 新年会 15:30～17:30
- ❖ 会場：レストラン「コトコト coto coto」(奈良市東寺林町 38、奈良市ならまちセンター1F)
- ❖ 1 月にあらためてご案内しますが、ご予約の程よろしくお願い致します。（事務局）

**奈良日仏協会創立 25 周年記念****フランス文化祭****参加へのお願い**

Mon Nara 10 月号でご案内しましたように、来年奈良日仏協会は創立 25 周年を迎えます。この祝賀行事として、会員主体の「フランス文化祭」の開催を予定しています。会員が主役となって、お互いの懇親を深め、新たな出会いの場となるような行事にできればと考えております。

日時は今のところ来年 6 月 15 日（土）か 16 日（日）のいずれかに絞られましたが、1 月 10 日の理事会で正式に決定し、総会案内の送付時に正式な日時をお知らせする予定です。会場は、生駒市セイセイビル 1 階の文化ホールを予定しています。できるだけたくさんの会員の皆様の参加を楽しみにしております。



《映画会のお知らせ》2019 年 2 月 19 日（火）13:30 ～16:00、香芝市二上山博物館の企画で、映画『**シェルブールの雨傘**』（1964）の上映会があります。同博物館からの協力依頼で、シネクラブメンバーが映画解説のお手伝いをするようになりました。映画は全台詞が歌からなる画期的なミュージカル作品、主演のカトリーヌ・ドヌーヴは、この作品で一躍世界に知られる女優となりました。

会場：香芝市中央公民館 2 階（近鉄下田駅下車、西へ徒歩 8 分）視聴覚室、問合せ：090-8538-2300（浅井）

《2018 年度第 5 回理事会報告》.....事務局

日時：2018 年 11 月 15 日（木）15:00～17:10。

場所：放送大学奈良学習センター Z306 号室。

出席者：三野、ジャメ、野島、浅井、井田、藤村、高松、大内、喜多、菌田、杉谷。

議題 1. 2018 年度会員数：新(再)入会 7、退会 2、91 件中 8 件未納。

議題 2. 9/20 理事会後の活動：2018 年度ガイドクラブ「吉野川宮滝周辺散策と手漉和紙工房見学」（10/13）、「興福寺ギメ美術館出陳記念慶讃コンサート」（10/28）。

議題 3. 今後の行事：秋の教養講座「服装で読み解くフランス文学」講師 村田京子（11/23）、第 49 回日仏シネクラブ例会「アラン・ドロンの特集④」ヴィスコンティ監督『山猫』（11/25）。

議題 4. Mon Nara。

議題 5. その他：2019 年度の取組み。奈良日仏協会 25 周年記念行事計画について。

2018 メーリングリスト。

次回理事会：1 月 10 日（木）15:00～16:30 Z306 号室予定。



編集後記 ☆今回はじめて Mon Nara の編集を担当いたしました。小学校時代に夢中になった学級新聞づくりを思い出しました。☆編集の《壁》となったのは Word による作業でした。各ページにいろいろな種類の手紙・写真がある上、ページ間相互に関連がありますので、一部分を不用意に変更・移動すると自動化機能で他所に思わぬ変化を引き起こすのです。☆草創期のパソコンの開発に携わった身ですが、高度に進化したワープロソフト、DTP（デスクトップ・パブリッシング）を学び直し実習することができ、大いに脳トレになりました。（R. Ouchi）

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿を歓迎します。新鮮で多様な話題やホットなフランス情報などをお寄せください。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は **1 月 25 日**が原稿締切日です。

Mon Nara 2018 年 12 月号 numéro288

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: nara.afj@gmail.com FAX: 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者: 三野博司